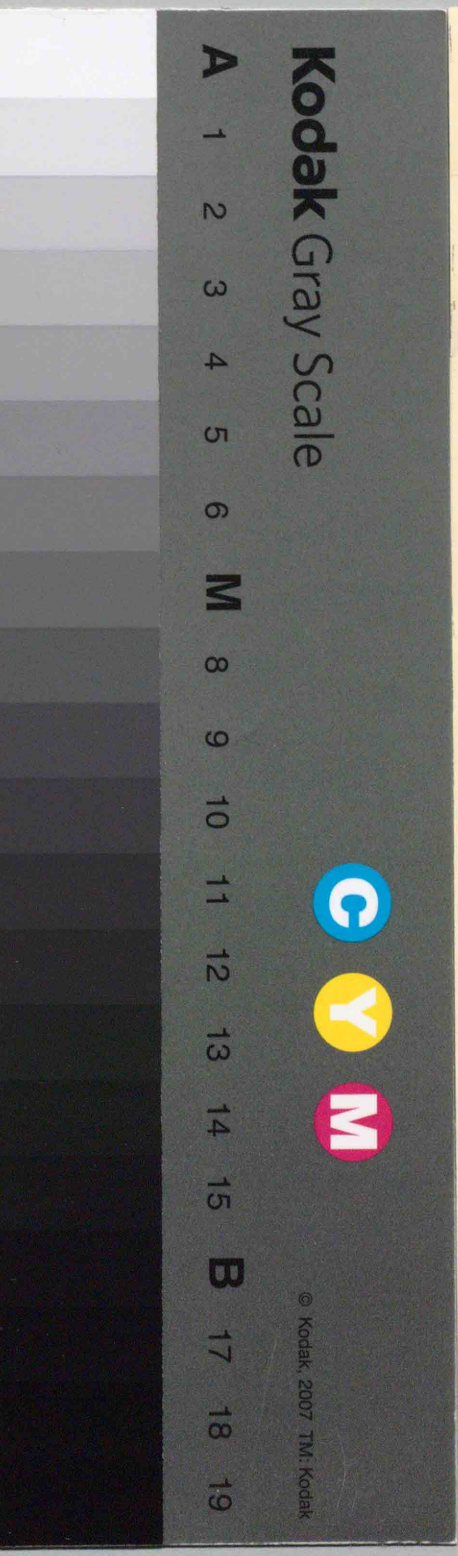
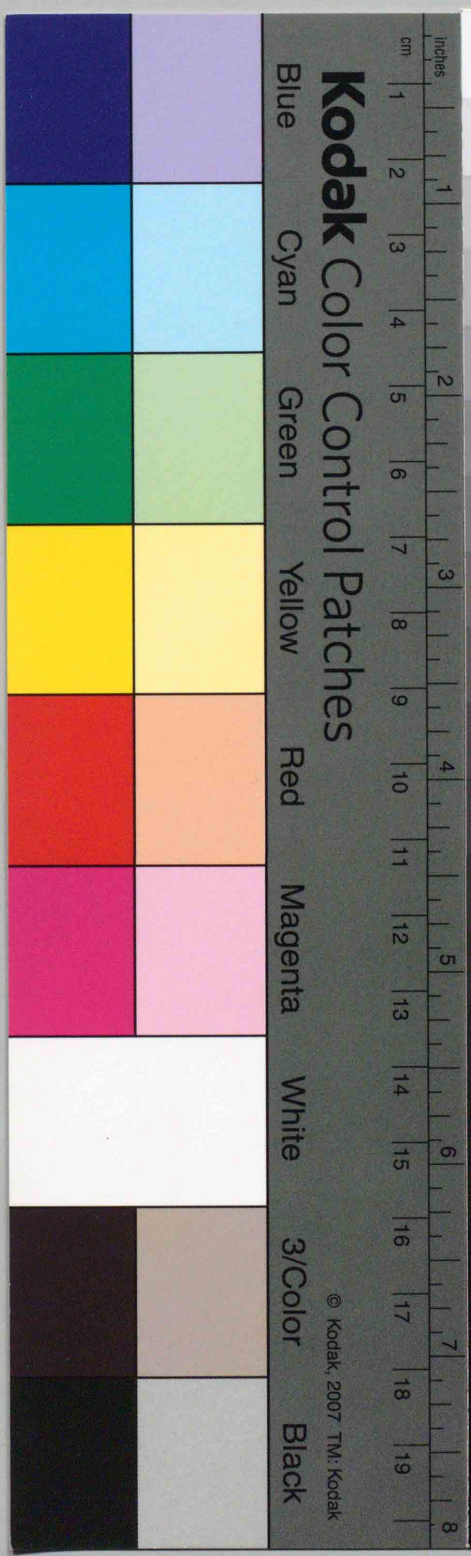


3759  
Mo14  
資料室

男子用  
小學農業書 卷二  
文部省



41300

教科書文庫

4

610

31-1940

20060  
14283



375.9  
Mo 14

資料室

男子用

小學農業書 卷二

文部省

目 録

第一課	農學……………	一	第十二課	繭及び製絲……………	十七
第二課	作物……………	二	第十三課	麥類の病害……………	十八
第三課	稻……………	三	第十四課	霖雨の害……………	二十一
第四課	浸種……………	五	第十五課	麥類の收穫……………	二十一
第五課	苗代……………	五	第十六課	田の草取……………	二十二
第六課	田植……………	七	第十七課	稻の灌漑……………	二十三
第七課	蠶及びその掃立……………	八	第十八課	養蠶……………	二十四
第八課	蠶の飼育 其の一……………	十	第十九課	稻の害虫……………	二十六
第九課	蠶の飼育 其の二……………	十二	第二十課	稻の病害……………	二十七
第十課	蠶病……………	十三	第二十一課	病蟲害の防除……………	二十九
第十一課	蠶室・蠶具の消毒……………	十六	第二十二課	益蟲及び益鳥……………	三十



第二十三課	害獸……………	三十三	第三十六課	米の收量……………	五十三
第二十四課	蜜蜂……………	三十三	第三十七課	收穫物の貯藏……………	五十三
第二十五課	豚……………	三十六	第三十八課	母本の選擇……………	五十四
第二十六課	牛……………	三十八	第三十九課	品種の改良……………	五十五
第二十七課	牛乳の利用……………	四十一	第四十課	土壤の由來……………	五十六
第二十八課	馬……………	四十二	第四十一課	腐植……………	五十七
第二十九課	家畜の飼養……………	四十四	第四十二課	土層……………	五十八
第三十課	家畜の管理……………	四十五	第四十三課	土壤の成分……………	五十九
第三十一課	牧草……………	四十六	第四十四課	肥料の成分……………	六十
第三十二課	漬物……………	四十八	第四十五課	下肥……………	六十二
第三十三課	味噌及び醬油……………	五十	第四十六課	厩肥・堆肥及び綠肥……………	六十三
第三十四課	稻の收穫……………	五十一	第四十七課	油粕類及び魚肥……………	六十五
第三十五課	米の調製……………	五十二	第四十八課	米糠及び骨粉……………	六十六

第四十九課	硫酸アンモニア及び過燐酸石灰……………	六十七	第六十二課	土地……………	七十八
第五十課	草木灰……………	六十八	第六十三課	資本……………	七十九
第五十一課	土壤の吸收力……………	六十八	第六十四課	勞力……………	八十
第五十二課	アンモニア及び硝酸の化成……………	六十九	第六十五課	副業……………	八十一
第五十三課	肥料の配合……………	七十	第六十六課	農業の經營……………	八十一
第五十四課	肥料の混合……………	七十一	第六十七課	農家の共同……………	八十二
第五十五課	肥料の施用……………	七十二	第六十八課	農業簿記……………	八十三
第五十六課	間接肥料……………	七十三	第六十九課	市場……………	八十六
第五十七課	酸性土壤及びアルカリ土壤……………	七十四	第七十課	農學校・農事試驗場・農會……………	八十七
第五十八課	土壤の肥瘠……………	七十四	第七十一課	農業と國家との關係……………	八十八
第五十九課	土地改良……………	七十五			
第六十課	耕地整理……………	七十七			
第六十一課	輪作及び連作……………	七十七			

小學農業書 男子用 卷二

第一課 農學

農學は農業を営むに大切な學問である。我が國の農業は開闢の當時から行はれてゐたが、農學の發達は近代のことである。近年我が國の農業が長足の進歩をしたのは、農學の力によることが多い。



佐藤信淵

つとめて經驗を積み、技術を練ると共に農學を修め、智徳を兼ね備へた良い農業者となることを心掛け

ねばならぬ。

第二課 作物

作物は野生植物から人爲によつて育成せられたものであつて、人の需める部分が殊によく發育してゐる。故に作物は一種の畸形であつて、其の性虚弱である。

作物はよく選種し、又栽培を丁寧にして之を保護せねばならぬ。保護を怠れば發育が不良なばかりでなく、其の特性が退化する虞がある。

作物の品種も亦人爲によつて育成又は維持せられるものである。農家は採種を嚴重にして其の特性を維持し、又之を改良せねばならぬ。

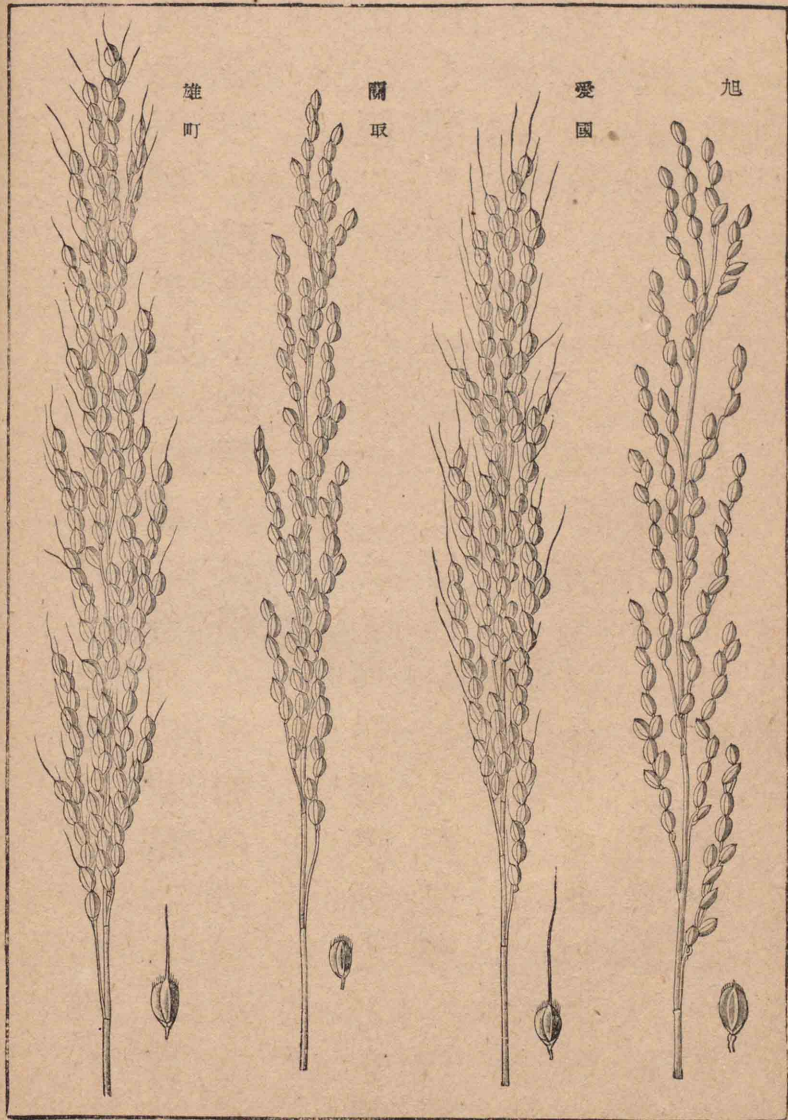
第三課 稻

稻は我が國では最も大切な作物で、南は臺灣から北は北海道に至るまで廣く各地に栽培せられ、其の作付面積及び米の收穫高は年々増加の勢を示してゐる。

米は飯に炊いて常食となす外、餅菓子糊などを製し、酒を醸し、麴を造るにも用ひられる。藁、米糠及び粃殻も亦利用の途が廣い。

稻は米質によつて粳と糯とに分け、成熟の早晩によつて早生、中生、晩生の別がある。稻には澤山の品種があつて、それによつて風土に適否があり、收量に多少があり、品質に良否があるから、よく選擇して栽培せね

種品の稻



ばならぬ。

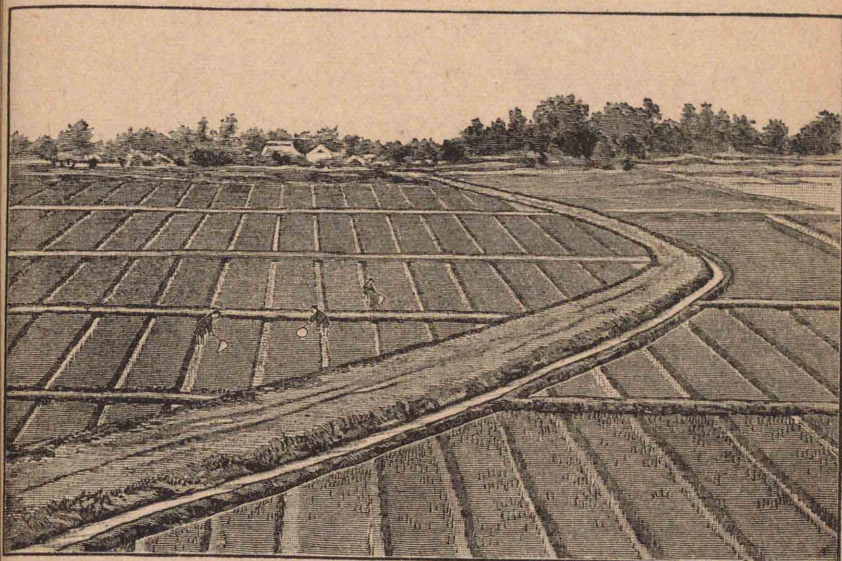
第四課 浸種

種粃は播種する前に浸種するのが常である。川池などで浸種を行ふ場合には、種粃を細長い俵に入れて緩く縛り、浮び上らぬやうにして浸す。又桶に水を入れて浸種する場合には、時々水を取換へることが肝要である。

浸種を行へば種粃が十分に水を吸収してゐるので、播種の際に種子がよく沈み、發芽が早くてよく揃ふ利益がある。浸種の日数は約一週間でよい。蔬菜類も往々浸種して後に播種することがある。

第五課 苗代

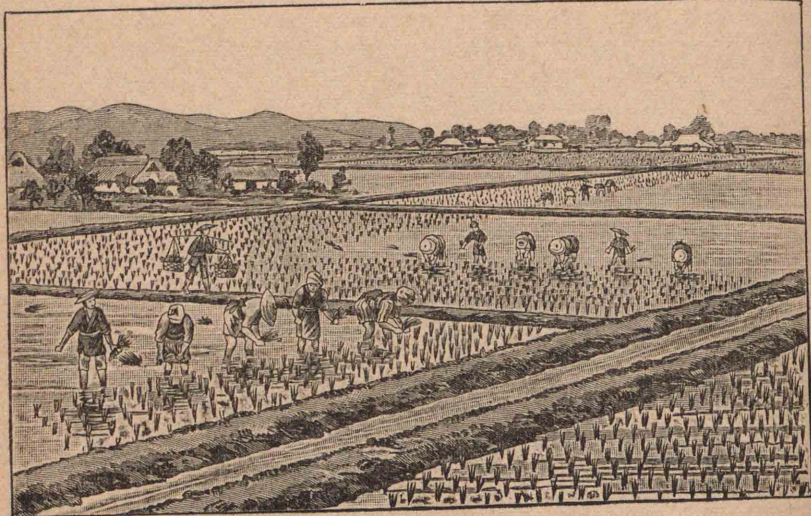
苗代



稲は通常春、苗代で苗を作り、夏の初頃本田に移植する。苗代は稍、浅く耕して肥料を施し、水を灌いでよく耙き均し、短冊形に區切つた後、浸種した種粃を取つて厚薄なく播種する。

苗代は日當りや風通しのよい、水の掛引に便利な地を選んで設け、肥料の種類と分量とに注

田植



意し、又水の掛引を適當にして、苗を強健に育てるこ  
とが肝要である。

第六課 田植

稻田の整地を行ふには、先づ田を耕して水を灌ぎ、馬鍬其の他の農具を用ひてよく土塊を碎き、且肥料を施す。整地は地方により又土質などによつてその方法を異にするものである。



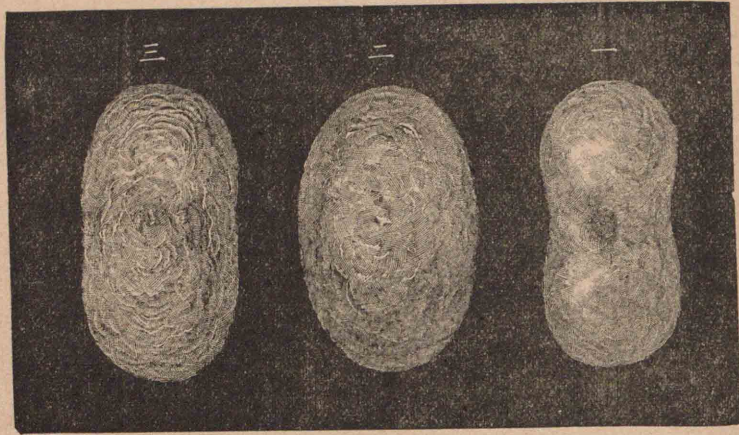
八

整地を終れば、苗を丁寧<sup>に</sup>に抜取り、根を洗ひ、數本を一株として深過ぎぬやうに植付ける。株間及び一株の本數は、品種の分蘖力、氣候の良否、土地の肥瘠などによつて加減せねばならぬ。田植にはその時期を誤らぬやうに注意し、成るべく無風で溫暖な日に行ふがよい。

第七課 蠶及びその掃立

蠶は産地によつて日本種・支那種・歐洲種に分ち、又孵化の回数によつて一化性・二化性・多化性に分ける。各多數の品種がある。近年は日支・支歐などの一代雜種が廣く飼育せられる。是等はそれごとく體質・絲量・絲質などに差異があるから、適當なものを選んで飼育

繭

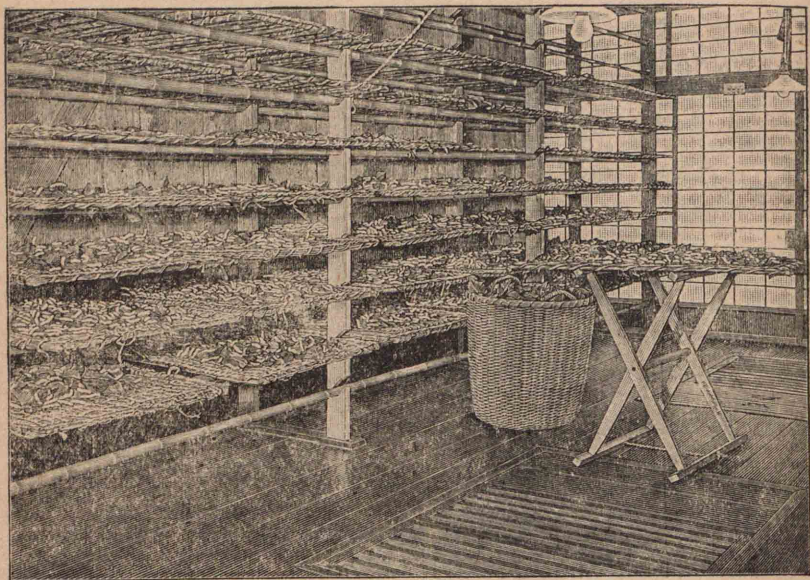


一 日本種      二 支那種      三 歐洲種

九

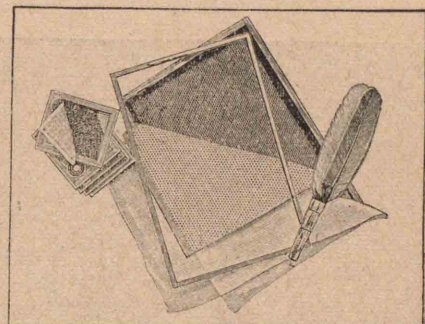
することが肝要である。蠶を掃立てるには、先づ催青を行ふ。之を行ふには豫て冷所に貯へて置いた蠶種を蠶室に移し、適當な溫熱と濕氣とを與へて、その孵化を促す。催青には又催青器を用ひることもある。種紙の卵面が漸く青色を呈し、早いものが既に孵化し始めたならば、廣い紙

飼育室

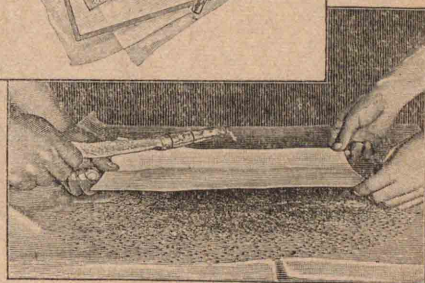


準とし、其の一倍乃至三倍にする。  
 給桑は、稚蠶期には一回に與へる量を少くして回数を多くし、壯蠶期には之に反して回数を少くして一回に與へる量を多くする。  
 桑葉は、發育がよくて養分に富み、硬軟適度なものがよい。故に桑園には早・中・晩の品種を適當

掃立



ばら種及びその掃立器



平附蠶種の掃立

へ、後之を適當な面積に擴げる。

第八課 蠶の飼育 其の一

蠶には一日に數回桑を與へる。桑葉は稚蠶期には剉んで與へるのが常で、その大きさは蠶の體長を標

で包んで置き、大部分が孵化した時種紙を取出し、紙の上に卵面を下に向けて持ち、急に種紙の裏面を打つて蟻蠶を落す。蟻蠶はその重量を秤り、次に粟糠又は碎いた粗殻をその上に撒布し、剉んだ桑の葉を與

な割合に栽培し、肥培を怠らぬやう注意することが肝要である。

蠶兒が成長するに従つて分箔ぶんぱくをなし、又除沙じよさを行はねばならぬ。分箔と除沙とは、第四齡までは各齡二三回、大抵同時に之を行ふのが常である。第五齡には分箔は二回行ひ除沙は毎日、一二回行ふ。

第九課 蠶の飼育 其の二

蠶室内の温度は攝氏二十一度乃至二十三度を標準とし、激變のないやうに注意せねばならぬ。春蠶期には、第四齡頃まで火力を用ひて室内を温めるのが常である。又乾濕を適度にするには、蠶兒の飼育上甚だ大切なことである。即ち乾燥に過ぎる際は、撒水

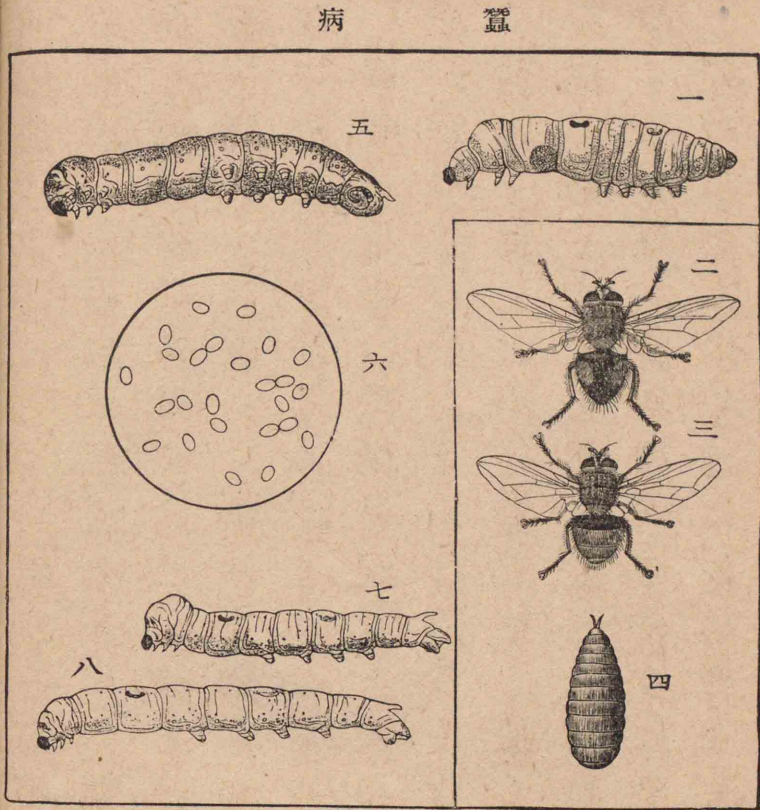
其の他の方法によつて濕度を高め、之に反して濕度の高過ぎる場合には、火力を加へ、粗穀・切藁などを撒布し、或は給桑を減ずるなど、つとめて乾燥を圖る。又蠶室・蠶具を清潔にし、除沙を怠らぬやうにし、或は空氣の流通を調節するなど、つとめねばならぬ。

眠起の取扱は蠶兒の飼育上大切なことである。蠶兒が眠に近づいたならば、除沙を行ひ、稍、温度を高め、て就眠を促し、眠中は稍、温度を低くし、濕度を高めて脱皮し易くする。止桑と桑付とは特に其の時期と分量とに注意し、蠶を揃へるやうにせねばならぬ。

近年手数を省く爲に、條桑育・全芽育等が行はれる。

第十課 蠶病

一、蠶蛆の害を受けた蠶兒 二、蠶蛆の雄 三、同雌 四、蠶蛆  
五、微粒子病にかゝつた蠶兒 六、微粒子 七、八、軟化病蠶



蠶病には種類が多い。その中でも普通なものも軟化病である。之を豫防するには飼育に注意して、蠶兒を強健に育て、蠶室・蠶具を清潔にし、又高温と多湿とを避けねばならぬ。膿病の豫防も亦之に準

ずる。

微粒子病も亦恐るべき病である。此の病は排泄物・屍體などに含まれてゐる微粒子が、桑に付いて蠶の體内に入つて起すものである。之を豫防するには、蠶室・蠶具の消毒をなし、又飼育中は清潔にせねばならぬ。又母體から卵にも傳はるから、無毒の蠶種を選ばねばならぬ。

蠶蛆病は蠶蛆の寄生によつて起る病である。此の病は蠶蛆蠅が桑の葉に産みつけた卵を、蠶兒が桑と共に吞込むために起るのである。之を防ぐには、蠶蛆を殺して、其の繁殖を少くし、第三齡以後は成るべく風通しや日當りのよい高燥地の桑を與へるがよい。

蠶病には尙「かび」の寄生によつて起る硬化病と、壁蝨の寄生によつて起る壁蝨病とがある。

#### 第十一課 蠶室蠶具の消毒

蠶室及び蠶具を消毒するには、方法がいろいろある。其の中ホルマリン消毒法で蠶室を消毒するには、よく室内の掃除をなし、溫度を凡そ攝氏二十四度に保ち、約三十倍に薄めたホルマリン液を噴霧器で散布し、後十五時間以上密閉して置く。ホルマリンは又蠶具の消毒にも用ひられる。

蠶室を消毒するには、二百倍の昇汞水などを用ひることもある。

蠶具を消毒するには、ホルマリン消毒の外、蒸氣消

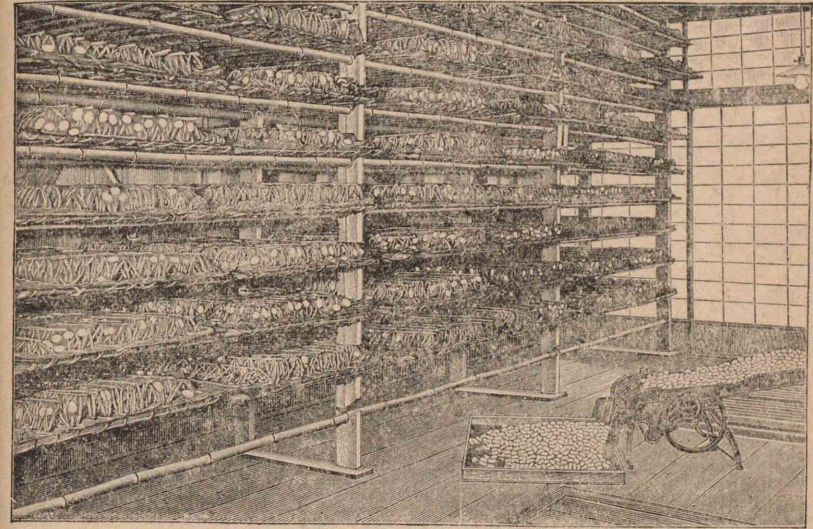
毒、日光消毒などがある。蒸氣消毒を行ふには、大釜の上、に箱を載せ、箱の中に蠶具を入れ、釜の湯を沸騰させ、約三十分間之を續ける。日光消毒を行ふには蠶具を時々日光に晒せばよい。

#### 第十二課 繭及び製絲

熟蠶は蔭に上せて繭を結ばせる。三十センチメートル平方に入れる熟蠶の頭數は、五十位がよい。

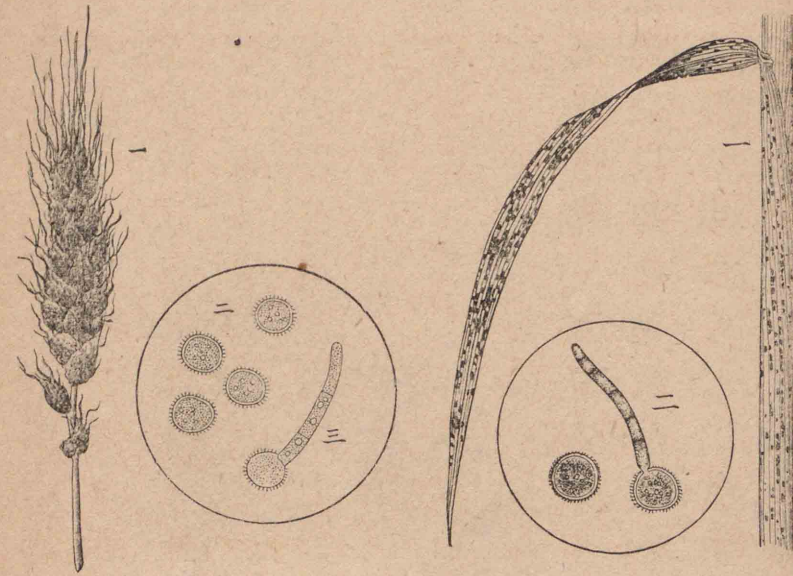
上蔭後凡そ一週間を経ると繭を收める。此の際製種用のものの外は、直ちに殺蛹を行ふがよい。

殺蛹には燥殺法が最も廣く行はれる。之には特別な装置を要するが、その溫度を約攝氏八十二度となし、四十分乃至一時間行ふのが適度である。



製絲は從來は人力で動かす座繰を用ひたが、近來は蒸氣力・電力などによつて運轉する製絲機械を用ひるものが多い。  
絲を繰取るには、繭を煮て靜かに搔きまはし、緒を求め、數本を合はせ、撚をかけて一本となし、棒に卷付けるのである。

第十三課 麥類の病害

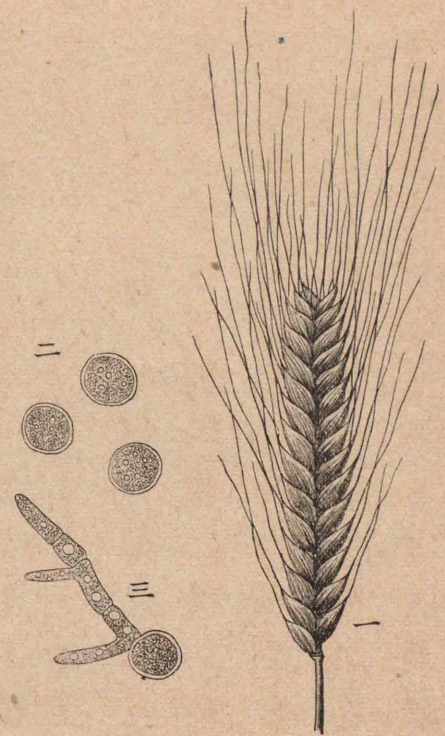


穂麥たつゝかに病穂黒裸 一  
菌病穂黒 三 二

葉麥たつゝかに病澁赤 一  
菌病澁赤 二

麥類の病害で最も目につき易いのは黒穂病である。これに裸黒穂と堅黒穂との二種あるが、何れも「かび」の寄生によつて起るものである。之を豫防するには、胞子の飛散する前に黒穂拔をなし、又種子に冷水温湯浸法を行ふがよい。  
冷水温湯浸法とは、

堅黒穂病、一、被害の穂 二、三、病菌の胞子



は、冷水を灌いでなるべく速に冷却させねばならぬ。赤澁病は麥の葉及び莖を侵す病で、厚播肥料過多及び多濕の場合などに發生し易い。よつて是等に注意して豫防することが肝要である。

麥の種子を六七時間冷水に浸した後、二三分間攝氏四十九度の湯に浸して、温め、最後に攝氏五十四度の湯に五分間浸す法である。湯から取出した種子

第十四課 霖雨の害

霖雨の時は土中及び空氣中の水分が多過ぎ、日光が不足し、温度が低いから、作物は發育を害せられる。それ故作物は成熟が遅れ、品質が悪くなり、且雜草が繁茂し、病菌が繁殖する等、種々の害を受けるものである。

第十五課 麥類の收穫

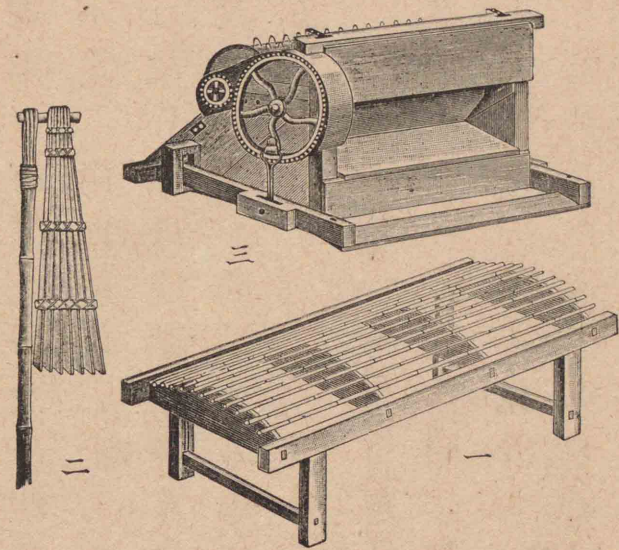
麥類の收穫は黄熟期に行ふが最もよい。黄熟期に達した麥は、天氣を見計らつてなるべく速に刈取り、よく乾かした後、扱落して脱穀を行ふ。次に篩、唐箕などをを用ひて調製し、更によく乾かして俵に入れて貯藏する。乾燥、調製、俵装などが悪いと、變質したり蟲害

を被るなどの虞が多いから注意せねばならぬ。

第十六課 田の草取

田の草取は、田植をした後、苗が根着いてから穂を孕むまでに數回行ふ。一番草には雁爪・田打車などを用ひ、二番草からは手で行ふのが常であつたが、近年は二番草

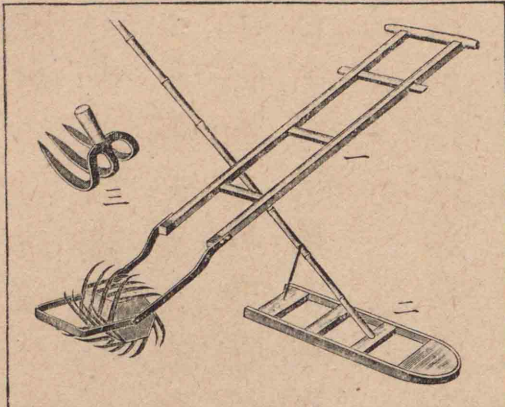
具用製調の類麥



一 麥打臺  
二 連麥  
三 足踏麥扱

以後にも除草器を用ひることが少くない。

具用取草の田



一、田打車 二、八段取 三、雁爪

草取は土を軟げて稲の根の蔓延するのを助けるばかりでなく、温熱と空氣とを土中に導いて根の作用を盛にし、又土中の養分の分解を促す効があるから、成るべく温暖な日を選んで水を落した後に行ふのが良い。雁爪は土を深く耕すに適し、田打車は仕事の捗どる利益がある。二番草以後に雁爪を用ひるときは根を害する虞がある。止草は時期の遅れぬやうにせねばならぬ。

第十七課 稻の灌溉



稲の灌漑はその栽培上最も大切な仕事の一で、田植の際から始め、穂の傾く頃に至つて止める。

植付の當時は水を稍深くして苗を保護し、苗が根着いた後は晝は浅水となし、穂孕から開花の頃は稍深くし、花が終つた後は又浅くし、穂が垂れるやうになれば水を排除して田面を乾かす。灌漑中も時々水を落して田面を空氣に觸れさせると共に田土を温めるがよい。

用水には通常河水を用ひるけれども、溜池などの水を用ひることもある。用水は温かなものがよい。

#### 第十八課 養鯉

鯉の飼養は通常池で行ふが、又稻田でも行はれる。

稻田で養鯉を行ふには、稲の苗の根着いた頃に稚魚を放つ。其の数は鯉の大きさによつて異なる。三センチメートル位のものでは十アールに付一千尾位を普通とする。灌漑水は多少深くし、又田地の所々に溝を設けて、水を排除した際に鯉の集まる場所にする。餌には蠶蛹・大豆粕・米糠などを用ひる。

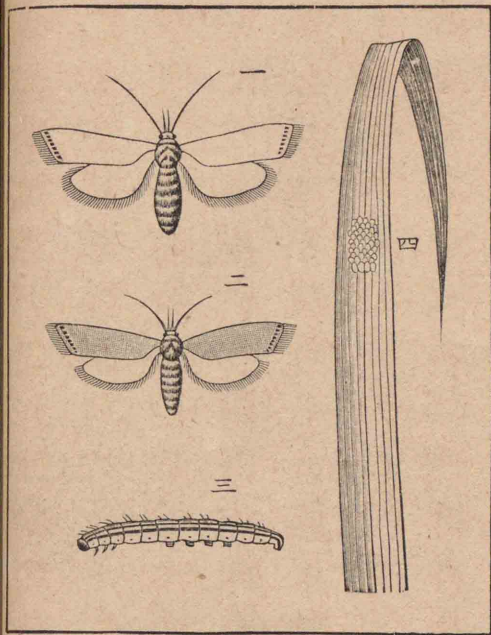
鯉を繁殖させるには、先づ小池に親鯉を入れ、柳の根、棕櫚の毛、水藻などを投じて之に産卵させる。

卵が孵化したならば、茹卵「みぢんこ」等を與へ、漸く成長して長さ一センチメートル乃至二センチメートルになつたならば、之を育養池に移す。稻田に放つのは三センチメートル位に成長した頃が最もよい。

第十九課 稻の害虫

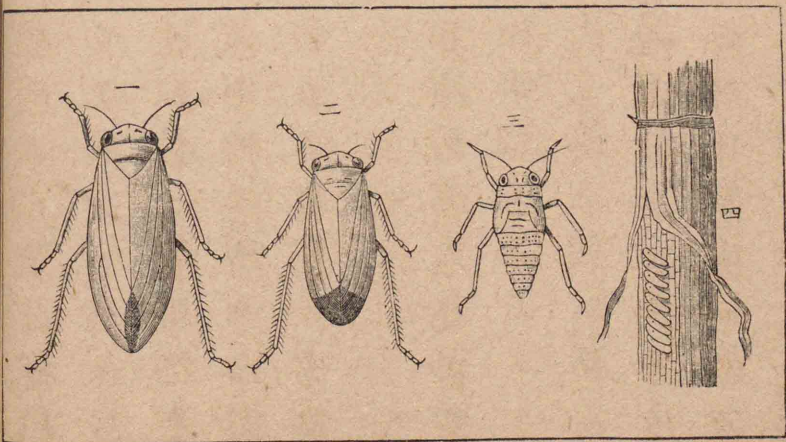
稻の害虫には螟虫、浮塵子、椿象、稻螟蛉などその種類が甚だ多い。

(虫螟化二) 螟



一、成虫(雌) 二、成虫(雄) 三、幼虫 四、卵塊

(ひばこよるぐまつ) 子塵浮



一、成虫(雌) 二、成虫(雄) 三、幼虫 四、卵

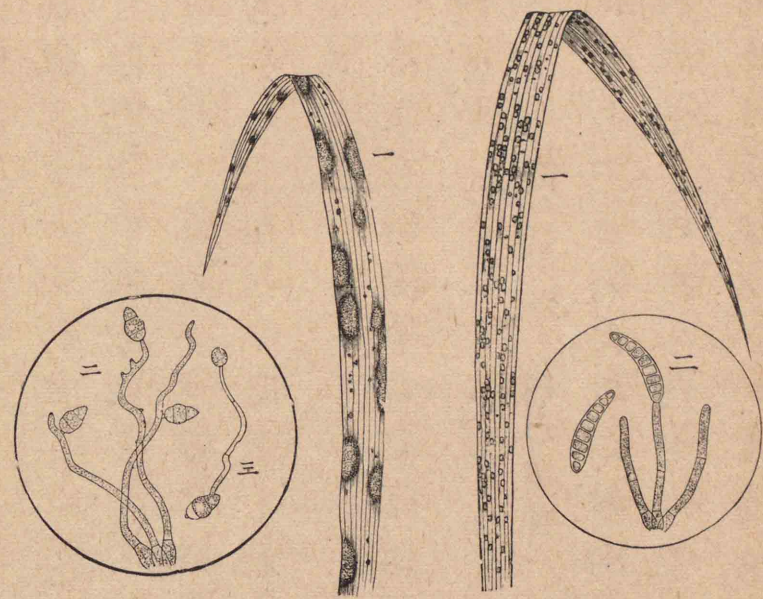
螟虫を驅除するには、卵塊の採取、捕蛾、枯莖及び白穂抜きなどを行ふ。

浮塵子の驅除法としては、油殺法が最も効果の有るものであるが、冬期に畦畔の雑草を焼き、その中で越冬してゐる浮塵子を焼き殺すのも亦有効な方法である。

椿象を驅除するには、捕殺及び卵塊の採取などを行ふ。

第二十課 稻の病害

稻の主な病には稻熱病及び葉枯病がある。是等は「かび」などの寄生によつて起り、傳播が往々極めて速なことがある。



一 胡麻葉枯病にかゝる  
二 葉稻たつ菌病  
三 熱稻菌病にかゝる

稻熱病を豫防するには、强健な品種を選択して栽培し、過肥・厚播密植及び冷水の灌漑などを避けて、稻を强健に育てることが大切である。

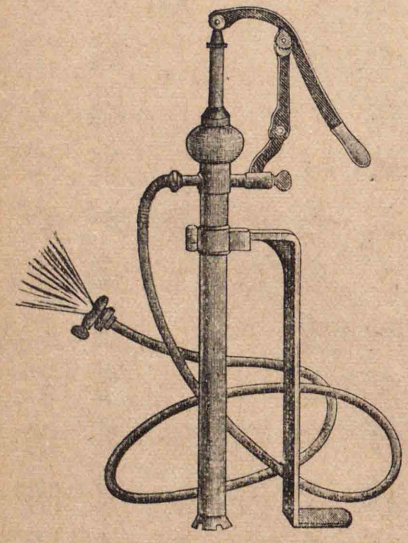
稻の葉枯病には、胡麻葉枯病と白葉枯病とがある。豫防法は何れも稻熱病

に準ずる。

第二十一課 病蟲害の防除

作物は種々の病害及び蟲害を受易いものである。同種類の作物を連続して栽培するのを避けるやうに作付の順序を工夫することや、病蟲害に對する抵抗力の強い品種を選んで栽培することが必要である。又選種及び栽培法に注意して作物を强健に育てると共に、

噴霧器

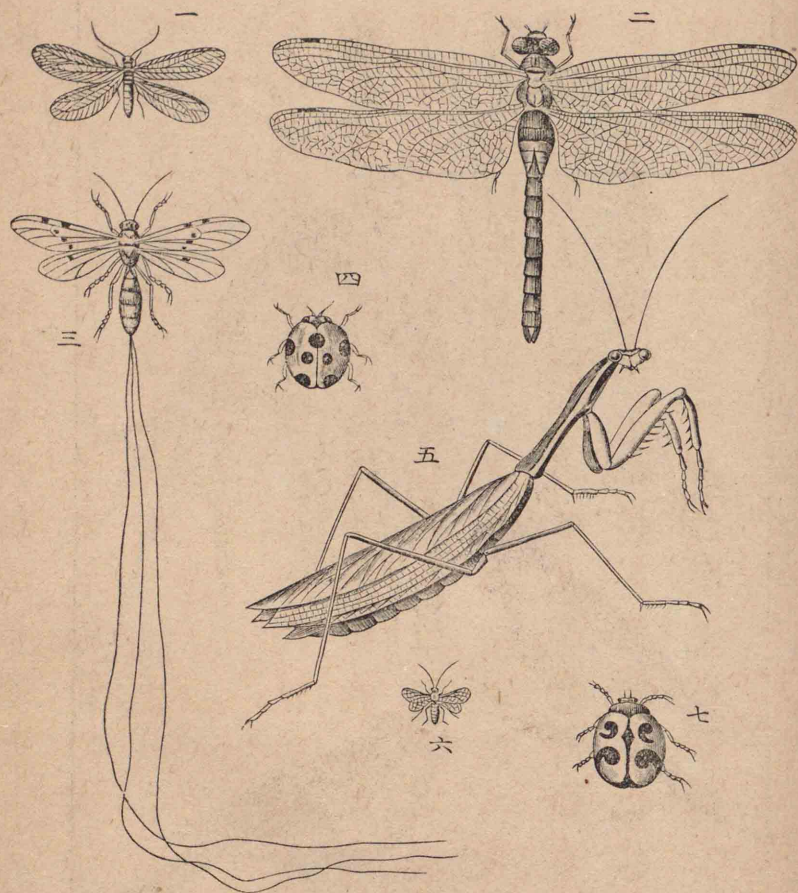


場合によつては薬劑を撒布するなどして、之を豫防  
することが肝要である。若し病蟲害が発生したなら  
ば、速に手當をせねばならぬ。

第二十二課 益蟲及び益鳥

蟲類には、蜻蛉せんりやう、瓢蟲ひょうちゆう、蠟螂ろうらう、くさかげろふなどのやう  
に害蟲を捕食し、或は馬尾蜂ばび、小糠蜂せうかうちなどのやうに害  
蟲に寄生して之を斃す益蟲も少くない。是等はよく  
保護して繁殖を圖るべきである。又ベダリヤてんた  
うむしのやうなもの、イセリヤ介殼蟲を驅除する  
ために特に繁殖させて、これを利用することがある。  
鳥類にも亦燕あつち、雲雀うんせき、啄木鳥てくもくちう、四十雀しじうせき、杜鵑とくせんなどのやう  
な益鳥がある。益鳥は特に法律を以て保護する。

益 蟲



一 さかかげろふ 二 とぼん 三 馬尾蜂 四 なほいしんでたんむし  
五 かまきり 六 こぬかちば 七 ベダリヤてんたむし

鳥 益



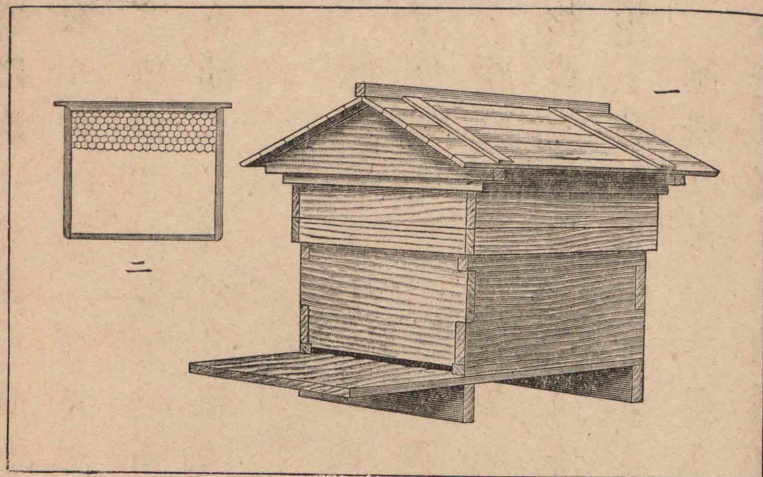
一、つばめ  
二、きつこき  
三、四十雀  
四、ひばり

第二十三課 害獣

鼯鼠いもぐらは地中に穴道を造つて作物を害する。之を防ぐには、捕獲器で捕殺し、或はその侵入を防ぐ爲に、苗床などではその周圍に板・杉葉などを埋めるがよい。野鼠は各種の作物を喰害し、而も繁殖が甚だしいから其の害も随つて多い。之を驅除するには、野鼠チフス菌を蕎麥團子に混じ、これを食はせて殺し、又蛇鴉へびくらなどを保護して、捕喰させるのも効がある。

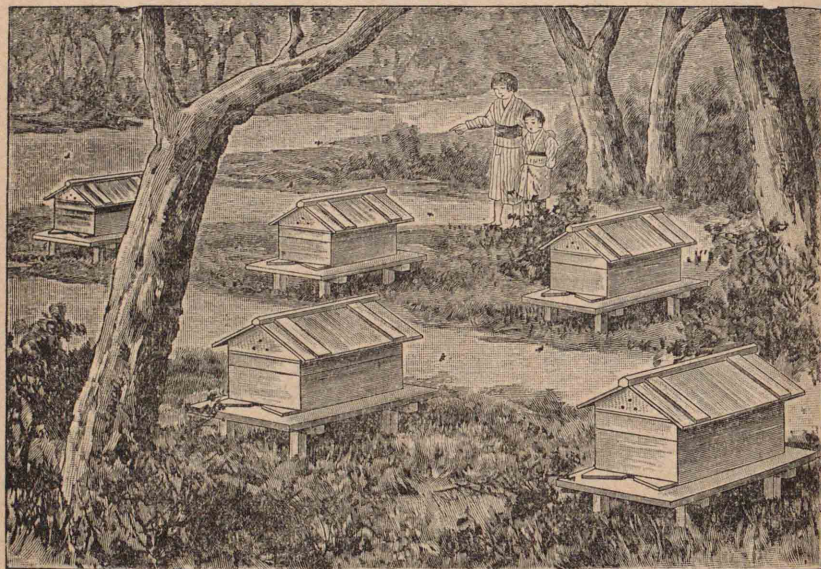
第二十四課 蜜蜂

蜜蜂は蜜と蠟とを採る爲に飼養せられる。蜜は主として食用に、蠟は薬用及び工業用に供せられる。養蜂は勞費が少いから農家の副業に適してゐる。



二 巢框

一 巢箱



養蜂場



三 雄蜂

二 蜂王

一 蜂働

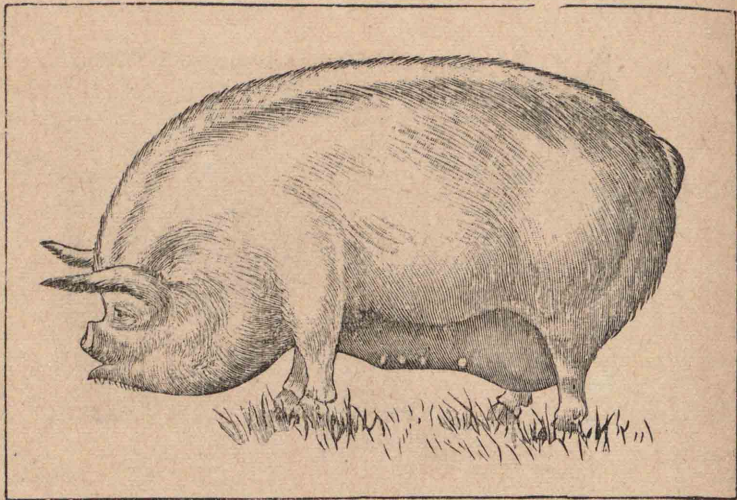
殊に雨の降る日が少く、春より秋にかけて花に富んだ地方に最もよい。蜜蜂を飼ふには通常巢箱を用ひる。巢箱は、乾燥し通風のよい場所におき、常に清潔に保ち、夏は涼しく、冬は暖にすることが肝要である。蜜蜂には通常飼料を與へないけれども、巢箱内の貯蜜が非常に減じた場合には、砂糖水などを與へることがある。蜜が十分に溜つたならば、巢框を取出して蜜房の蓋を切り、遠心分離

器にかけて蜜を分離する。蠟を収めるには、巢脾を切り、布に包んで湯に浸し、之を溶出させる。蜜蜂を増殖させるには、春夏の間に分封するものを捕へて、別の巢箱に入れて養ふのである。

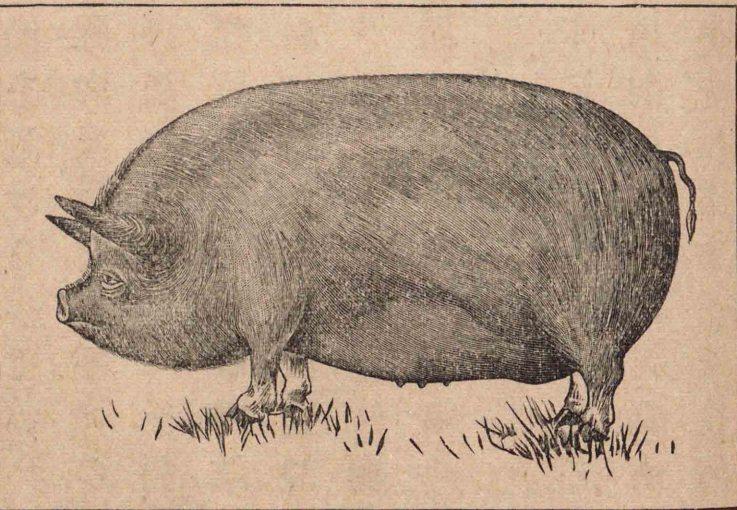
第二十五課 豚

豚にはヨークシー種、パークシー種などがある。豚は性強健で飼養し易く、又多産で成長も速である。豚は穀類、根菜類を始とし、臺所の残物、農産物の屑物、農産製造の際に得られる粕類など、殆ど飼料の種類を選ばず雑食するので、廢物利用の効が多い。飼料は多くは煮て與へる。通常は一日に三回與へるが、仔豚には四回與へる。豚舎は高燥で日當りのよ

種 - シク - ヨ

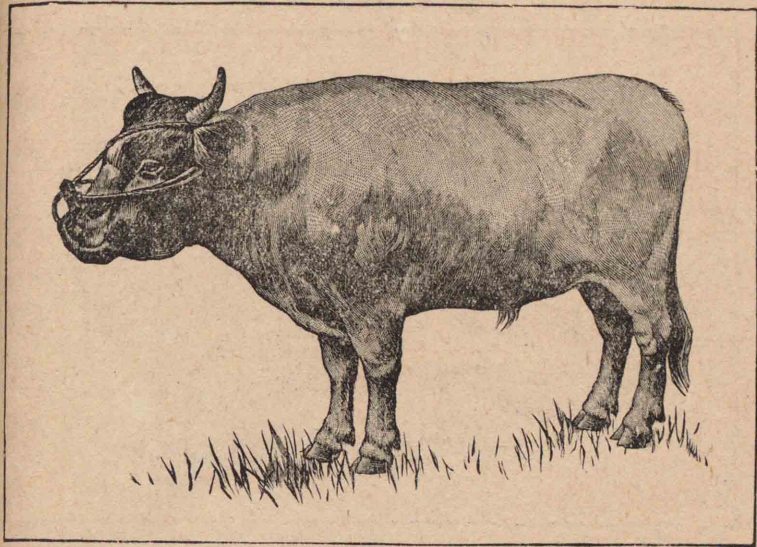


種 - シク - バ



い場所に設け、周圍及び床は厚板等で堅牢に作り、之

(牛馬但)牛本日



に接して運動場を設ける。場内には落葉樹を植ゑ、又

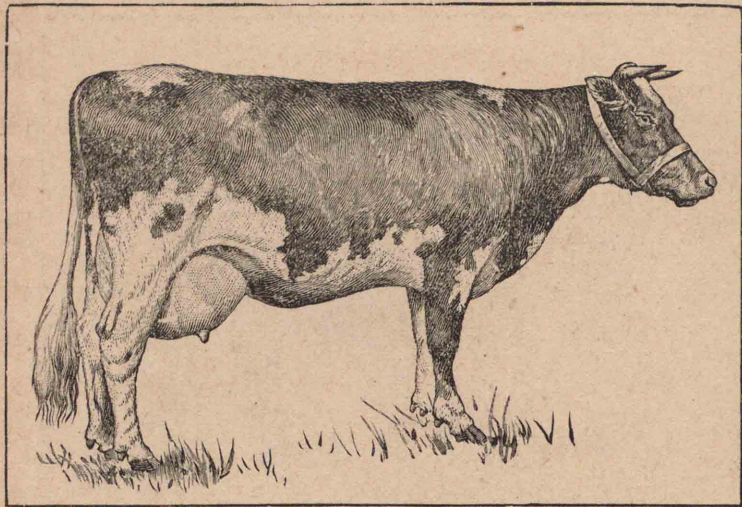
水溜を設けるがよい。

豚肉は生肉を種々の料理に用ひる外、燻肉を製し、又塩豚を造る。腸は腸詰の材料に供し、脂肪は精製してラードとなし、毛は刷毛を造るに用ひられる。

第二十六課 牛

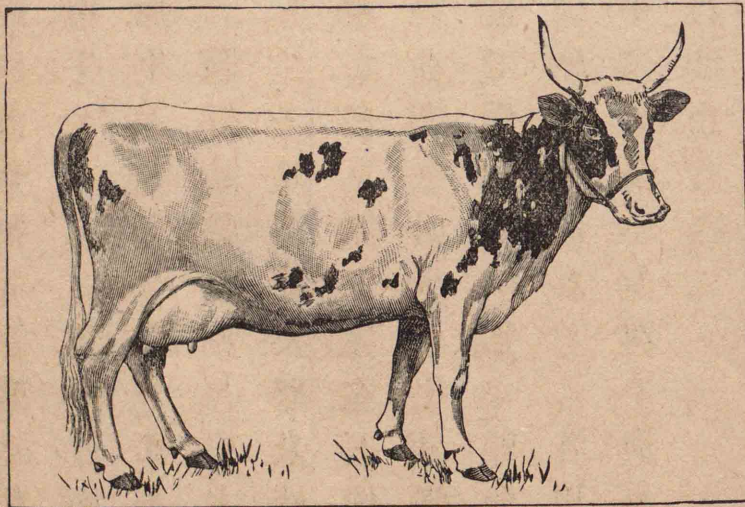
牛には品種が多い。之を役用・肉用・乳用に大別する。日本牛は主として役用で、

種ンイタスルホ



朝鮮牛も亦役用に適する。

種一シヤ一エ



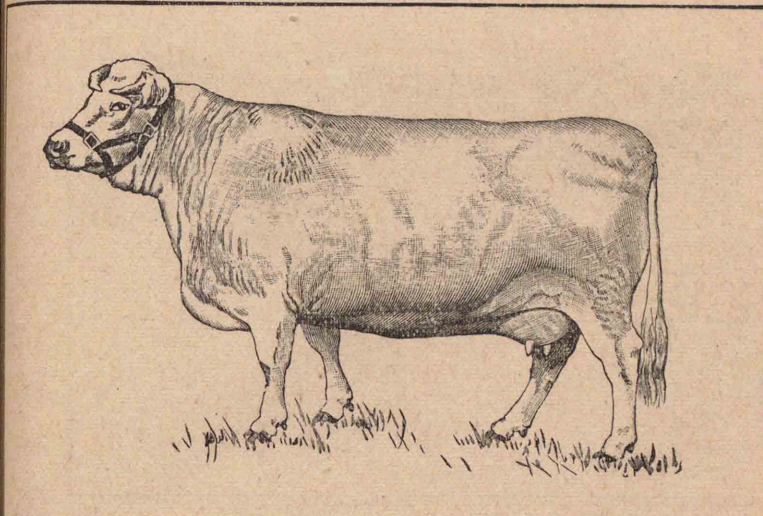


外國種ではホルスタイン種・エーヤン種等は乳

用牛として、短角種は肉用牛として有名である。

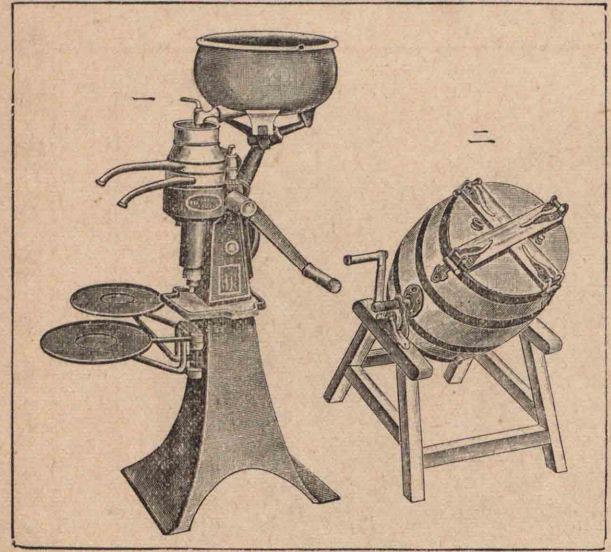
飼料は草・藁などを主とし、之に適宜大麥・米糠・穀などを加へ、食塩と飲料水とを與へる。牛は強健で消化力が強く、粗食に耐へるけれども、乳用牛には良い飼料を與へねばならぬ。  
牛舎は高燥で日當り

種 角 短



のよい處に設け、常に清潔に保ち、皮膚をよく掃除し、其の取扱は親切にすることが肝要である。

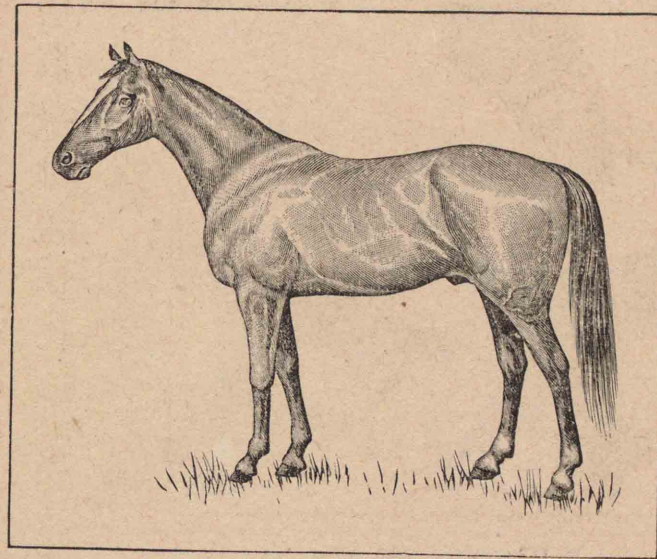
一、クリーム分離器 二、攪拌器



第二十七課 牛乳の利用

牛乳は養分に富み、消化が容易で栄養の効が多い。生乳は腐敗し易く、又病原菌を混入してゐることがあるから、殺菌して後に飲用に供せねばならぬ。  
牛乳は飲用せられる外、コンデンスミルク・バター・チーズなどに製せられる。

種血純國英



コンデンスミルクは、牛乳に砂糖を加へ、それを攝

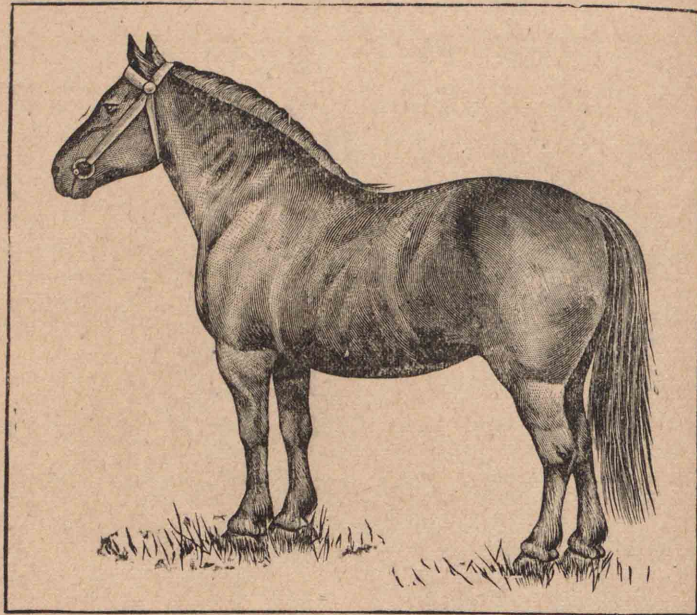
氏五六十度の温度で煮詰めたもので、よく保存に耐へ、生乳の代用にせられる。

バターは牛乳からクリムを分離し、そのクリムを醗酵させた後攪拌して製したものである。

第二十八課 馬

馬には品種が多く、乗

種ンロシルベ



用種・輓用種・農用種などに分ける。我が國では北海道南部地方・薩摩などに良馬を産する。

外國種中アラブ種・英國純血種・アングロ、アラブ種は乗用、ハックニー種・アングロ、ノルマン種は輕輓用、クライツデール種・ペルシロン種は重輓用として有名である。

馬の飼養管理は牛に準ずる。但し馬には装蹄を施

し、特に皮膚及び蹄の掃除を丁寧にし、運動が不足しないやうに注意せねばならぬ。

### 第二十九課 家畜の飼養

家畜を飼養するには、主として粗飼料を與へ、養分の不足を補ふ爲には、濃厚飼料を給する。飼料の分量は家畜の種類・年齢・體重用途などによつて加減せねばならぬ。

飼料の中に含まれてゐる主なる養分は蛋白質・脂肪・炭水化物であつて、飼料の種類により養分の消化に難易がある。

飼料の分量は、其の總量と消化される養分とに就いて計算して定め、飼料の配合については栄養率に

注意せねばならぬ。

飼料は適宜に調理して給與するがよい。調理を適當にすれば、食慾を進め、又消化が良好である。飼料は時を定めて給與し、又清き飲料水と食塩とを給することゝを怠つてはならぬ。

### 第三十課 家畜の管理

畜舎は高燥で日當りのよい場所に設け、換氣・採光に注意し、掃除し易い構造にすることが肝要である。畜舎の廣さは家畜の種類によつて加減する。役畜の外は、畜舎に附屬して運動場を設ける必要がある。

家畜の取扱は努めて親切にし、畜體・畜舎などは成るべく清潔に保ち、衛生に注意して病氣を豫防し、病

に罹つた場合には應急手當を行ひ、速に獸醫の治療

を受けるがよい。

家畜が傳染病に罹つた場合には、隔離及び消毒を嚴重にせねばならぬ。

第三十一課 牧

草

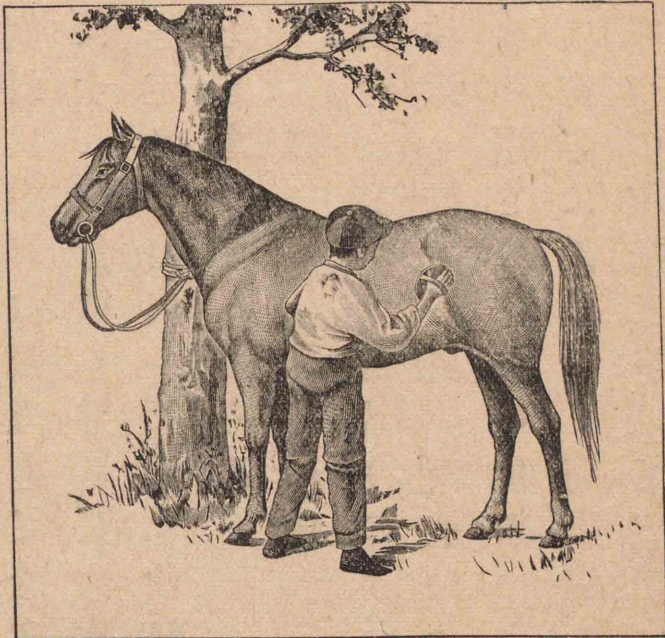
家畜を飼養するに

は、我が國では通常野

生の草を用ひるがよい。

るべく養分に富んだ消化の良い草を用ひるがよい。

入手の膚皮



牧

草



一 オーオ 二 クローバー 三 ササゲ

良い飼料を得るには、チモシー・オーチャードグラス・レッドトップ・ルーサーン・つめぐさなどの牧草を栽培す

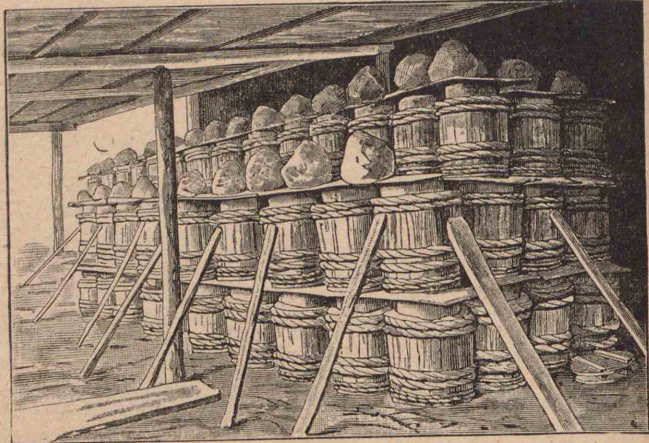
るがよい。

牧草を栽培するには、通常犁を用ひて土地を耕し、耙耨で土塊を碎き、輥軸を以て小塊を碎きながら地面を均した後、撒播器を用ひて播種し、芝耙耨で土を覆ひ、輥軸で鎮壓する。播種は春秋の二季に行はれ、往混播が行はれる。牧草は開花期に刈取つて乾燥する。是等の牧草は宿根であるから、年々播種する必要がない。

第三十二課 漬物

漬物には種類が多い。糠味噌漬を製するには、煮た食塩水と炒つた米糠とを練りまぜて、桶に仕込み、毎日かきまぜ、糠味噌の熟した後に蔬菜を漬込む。蔬菜

澤庵漬の製造



が軟かになり、よい香味を發するに至れば食用に供する。

澤庵漬を製するには、大根を一二週間乾かした後、食塩と米糠との混合物を下に敷き、其上に大根を密に並べ更に食塩と米糠とを混合したもので覆ひ、之を反復して漬込を終り、蓋を置いて壓石を載せる。水の上つた後は壓石は幾分軽くする

がよい。

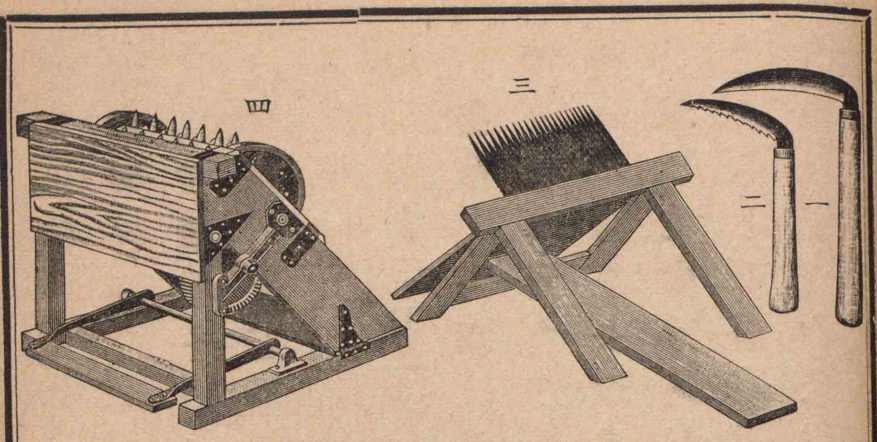
大根を乾かす度合、米糠と食塩との割合などは、貯

藏期間の長短によつて加減せねばならぬ。  
漬物には尙塩漬・味噌漬・奈良漬・麴漬などがある。

第三十三課 味噌及び醤油

味噌を製するには、一晝夜くらゐ水に浸して置いた大豆を蒸し、之を白に入れて搗き、米麴又は麥麴と食塩及び水とを之に混和して桶に仕込む。斯くすれば徐々に醱酵して成熟する。味噌には赤味噌・白味噌などの種類があるが、何れも蛋白質に富み、日常の食品として大切なものである。

醤油を製するには、小麥を炒つて粗く碎き、これと蒸した大豆とを混じて麴を造り、この麴と煮た食塩水とを以て仕込み、後度々攪拌して醱酵させる。十分



一 鎌 二 籾 三 扱稻 四 扱稻踏足

に醱酵したならば搾つて液汁のみを取り、ひき引ひきをなして殺菌を行ふのである。

第三十四課 稻の收穫

稻は適當な熟度に達したならば、天氣を見計らつて猶豫なく刈取るがよい。刈取の時期が早過ぎると、收量が少くて青米多く、又貯藏に適しない。之に反して遅きに失すると、脱落・鳥害などによつて收量を減じ、且色澤・香味なども劣るものである。

稻は鎌を以て刈取り、刈取つた稻は田面に伏せ、又は稻架に架けてよく乾かし、藁が十分乾いた後稻扱又は脱穀機を以て粃を扱落すのである。扱落した粃は糝・藁屑などを除いた後筵に擴げて適度に乾燥する。

第三十五課 米の調製

扱落した粃は筵に擴げてよく乾かし、後粃摺白で摺り、唐箕・箕などを用ひて粃殻を去り、篩萬石筵で摺残りの粃を去つてよく調製する。

粃の乾燥は甚だ大切なことである。乾燥が不十分であると、粃摺が困難で、碎米・傷米などを多く生ずるばかりでなく、米質が不良になり、又貯藏に堪へない。

調製した米は俵又は吠に入れて貯藏する。販賣用のものは特に其の俵装を良くせねばならぬ。俵装には二重俵を用ひ、結繩及び兩端の繩掛を丁寧にする。

第三十六課 米の收量

米の收量は、米の調製を終つた後に檢べ、これを十アール當りに計算するのが常である。收量を量るには、場合によつては坪刈法を用ひることもある。

米の收量は稻の品種及び風土によつて異なるは勿論、選種、栽培の方法、肥料の用量なども亦大なる關係があり、又天候の如何によつても大いに豊凶の差を生ずるものである。

第三十七課 收穫物の貯藏

收穫物は其の種類によつて貯藏法が異なる。穀物はよく乾かして俵に入れ、清潔で温度が低く乾いた場所に貯へるがよい。之に反する場所では虫害にかかり易いばかりでなく、變質の虞もある。

根菜類は水分に富み腐敗し易く、また凍害を被る虞があるから、之を貯藏するには多くは土中に埋め、温度と濕氣とに注意することが肝要である。また粗穀などを間に詰めて、腐敗の傳播を防ぐこともある。蔬菜及び果實を貯へるには、或は漬物となし、或は乾かし、又は罐詰に製する。また冷蔵庫に入れて置けば生の儘で長く貯へることの出来るものが多い。

## 第三十八課 母本の選擇

種子は良い母本から採らねばならぬ。良い母本とは、良い系統に屬し、よく品種の特徴を備へ、且健全に發育したものである。母本の選擇を怠ると、品種は次第に不良になる虞がある。

母本は普通に栽培した作物の中から選擇してもよいが、特に採種圃を設けて行へば最もよい。

## 第三十九課 品種の改良

品種改良の方法には、純系分離、偶然變異の利用及び人工交雜の三法がある。

純系分離とは、從來栽培せられてゐる品種の中から、優良な系統を分離選出する方法である。從來一品種とせられたものも種々の異なつた系統を混ざる



のが常であるから、此の法が行はれるのである。

偶然變異には、良い變異もあり、悪い變異もある。又その生ずることも稀であり、人爲によつて之を惹起させることも困難である。しかし一度生じたものは確實に遺傳するから、良好なる偶然變異物を發見すれば、良い新品種を得ることが出来る。

異品種の交雜を行ふときは、雙方の性質が分離結合して種々の新しいものを生ずる。此の中から選擇するときは、良好な新品種を得ることが出来る。

#### 第四十課 土壤の由來

土壤は岩石が風化して出來たものである。風化は温熱・水・空氣・生物などの共同作用によつて行はれる。

かくして生じた土壤が、其の儘母岩の附近に止まつて居るものを殘積土といひ、水力・風力などによつて運ばれたものを運積土と云ふ。

運積土のうち水によつて運ばれたものを水積土、風によつて運ばれたものを風積土といひ、水積土には又河成・海成などの別がある。火山灰土も亦運積土に屬する。

#### 第四十一課 腐植

植物が土中で腐敗すれば腐植が出来る。腐植は土壤に暗色を與へ、温度を高くし、保水力を増すなど、土壤の性質を良好にする効がある。

腐植は此のやうに大切なものであるけれども、其

の量が多過ぎる場合には、作物の生育を害する虞がある。

#### 第四十二課 土層

土層の最上部を占め、土粒又は色の等しい部分を表土といひ、それ以下を下層土といふ。

土壤の常に耕される部分を作土といひ、それ以下の土壤を心土といふ。作土はまた耕土ともいひ、心土よりも軟かく、色も稍黒く、よく風化してゐる。

作土は主として作物の根の蔓延するところであるから、作物の栽培上最も大切な部分である。但し心土の良否も亦作物の生育に關係することが少くない。

#### 第四十三課 土壤の成分

土壤は水分及び固形分から成り、固形分は更に之を有機成分と無機成分とに分けることが出来る。

有機成分は灼けば揮發する部分であつて、主に腐植である。

無機成分は珪酸・磷酸・硫酸・炭酸・塩素・礬土・酸化鐵酸・化滿俺・石灰・苦土・加里・曹達等で、此の外アンモニア・硝酸の如き窒素化合物もある。無機成分中最も多量に存在するものは珪酸と礬土で、酸化鐵が之に次ぎ、窒素・磷酸及び加里はその量が極めて少い。

土壤の成分中窒素・磷酸・硫酸・酸化鐵・石灰・苦土・加里は植物の最も大切な養分である。養分中直ちに植物

に吸収せられる状態にあるものを可給態といひ、然らざるものを不可給態といふ。

第四十四課 肥料の成分

土壤中に存する植物養分のうち、作物の生育に不足し易いものは窒素・磷酸・加里である。肥料を施すのは主として是等の不足を補ふ爲であつて、此の三成分を肥料の三要素といふ。主な肥料について三要素の含量を例示すれば左の如くである。

	窒素	磷酸	加里
下肥	〇・五七%	〇・一三%	〇・二七%
厩肥	〇・五〇	〇・二六	〇・六三
菜種粕	五・〇五	二・〇〇	一・三〇

大豆粕	七・〇〇	一・五〇	二・〇〇
練搾粕	八・三〇	五・六〇	〇・七〇
紫雲英(生草)	〇・四八	〇・〇九	〇・三七
硫酸アンモニア	二・〇〇		
智利硝石	一・五〇		
過磷酸石灰		一・五〇〇乃至二・〇〇〇	
骨粉	三・〇〇乃至四・〇〇	二・二〇〇乃至二・四〇〇	
米糠	二・〇八	三・七八	一・四〇
木灰		三・九〇	一・二七
藁灰		二・二〇	四・五〇
硫酸加里			四・〇〇乃至四・八〇

右のうち硫酸アンモニア・智利硝石などを窒素肥

料といひ、過磷酸石灰などを磷酸肥料といひ、木灰・硫酸加里などを加里肥料といふ。又下肥・厩肥・大豆粕・紫雲英などを有機肥料といひ、硫酸アンモニア・過磷酸石灰・草木灰などを無機肥料といふ。

第四十五課 下肥

下肥は我が國で最も廣く用ひられる肥料で、三分中比較的多く窒素を含んでゐる。其の組成は主として食物の種類によつて差がある。

下肥は暫く貯藏して後に施用することが多い。肥溜は冷やかな所に設け、屋根及び圍を作り、蓋を施して、アンモニアの揮散を防ぐことに努めねばならぬ。下肥は速効肥料であり、且養分が流失し易いから、

少量づつ數回に分けて施すがよい。又施した後には成るべく土を被ふがよい。

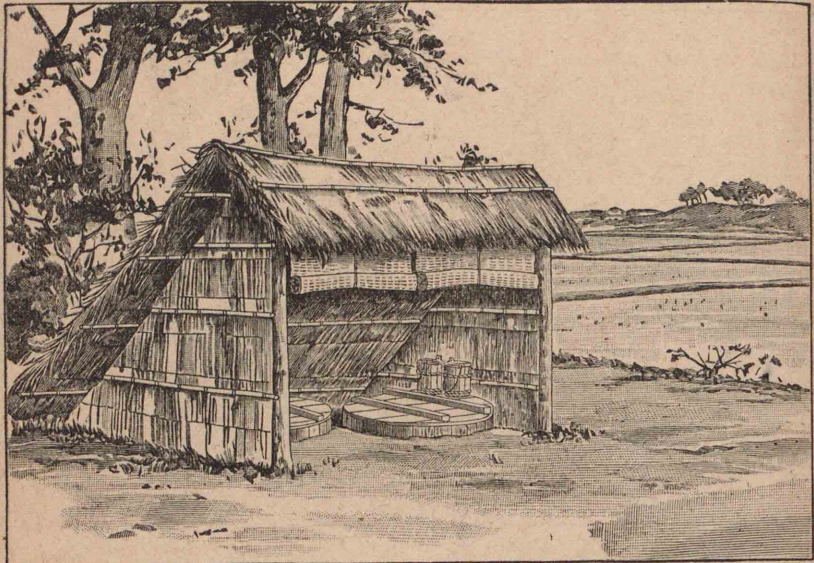
第四十六課 厩肥堆肥

及び綠肥

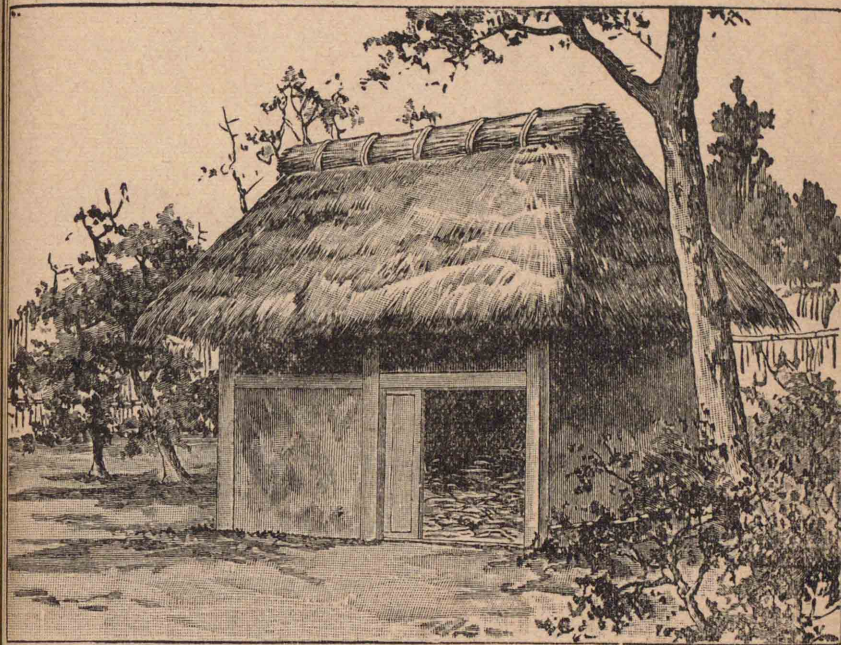
厩肥は有機物に富んだ肥料で、其の組成は家畜の種類、飼料、敷藁などによつて差がある。

厩肥は新鮮な儘用ひると効驗が遅いから、堆

肥 溜



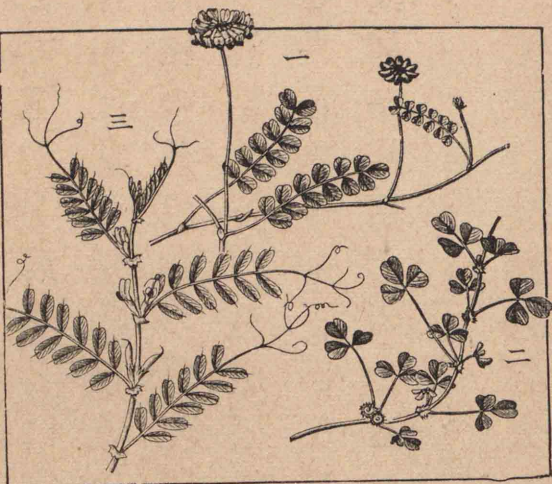
堆肥舎



積してよく腐熟させ堆肥となして用ひるがよい。

堆肥を作るには、堆肥舎を設け、厩肥又は藁草などを堆積し、下肥汚水などを注ぎ、適度に踏付ける。又常に濕潤に保ち、温度の過度に昇らないやうに注意し、且切返しを行

一 紫雲英 二 苜蓿  
三 ザイトウキッケン



に用ひることもある。

つて腐熟を一樣にすることが肝要である。

緑肥も亦有機物に富んだ肥料である。紫雲英・苜蓿・大豆・ザイトウキッケンなどのやうな荳科植物は、緑肥として最も適當である。緑肥は作付前に鋤込むのが普通であるが、又堆積して腐熟させた後

第四十七課 油粕類及び魚肥

油粕類の中最も廣く用ひられるものは、大豆粕と

菜種粕とである。何れも濃厚な肥料で、比較的多くの窒素を含んでゐる。

魚肥の中で最も主なるものは、鯨・鰯の搾粕と干魚とで、窒素と磷酸とに富む濃厚な肥料である。而して搾粕は其の効驗干魚に優るのが常である。干魚及び搾粕の外、魚類の料理屑なども良い肥料である。

油粕類及び魚肥は粉碎して用ひるか、又は腐熟させた後施すがよい。又是等は家畜の飼料となし、其の糞尿を施用することが經濟上有利な場合がある。

#### 第四十八課 米糠及び骨粉

米糠は磷酸と窒素とを多く含む濃厚肥料である。其の儘用ひることもあるが、腐熟させて用ひると効

驗が速である。又家畜の飼料となし、其の糞尿を利用することもある。

骨粉は牛・馬・鯨などの骨を粉碎して製したもので、生骨粉・蒸骨粉などがある。いづれも磷酸に富む遅効肥料である。

#### 第四十九課 硫酸アンモニア及び過磷酸石灰

硫酸アンモニアは濃厚な窒素肥料である。速効肥料であるから補肥に適し、液肥として數回に分施するがよい。但し濫用すると害があるから注意せねばならぬ。

過磷酸石灰は濃厚な磷酸肥料である。速効肥料ではあるが、流失の虞が少いから、基肥に用ひることが

多い。之を施用するには、種子及び作物根に觸れさせないやうにせねばならぬ。

#### 第五十課 草木灰

草木灰は加里に富んだ肥料である。加里の含量では、木灰は藁灰に優り、濶葉樹の灰は、針葉樹の灰に優るのが常である。強く焼くと灰の効驗が減ずるから、藁塵芥などを焼く場合には、成るべく徐々に焼くがよい。草木灰は其の儘用ひ、又は魚肥、油粕類などと混じて用ひる。

#### 第五十一課 土壤の吸収力

土壤は吸収力によつて肥料成分を保蓄し、徐々に之を作物に供給する。吸収力は土壤によつて強弱が

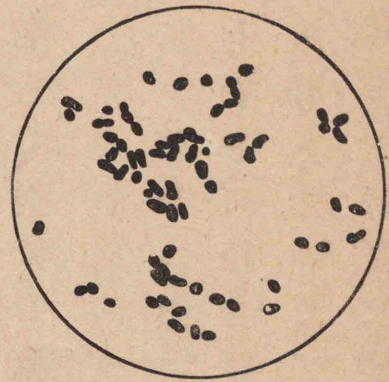
あり、砂土は弱く、埴土、腐植土、火山灰土は強いのが常である。肥料の三要素中、土壤に吸収せられるものはアンモニア態窒素、磷酸及び加里で、硝酸態の窒素は吸収せられない。

吸収力の弱い土壤に肥料を施す場合、及び土壤によく吸収せられない肥料を用ひる場合には、數回に分施して、養分の流失を少くするやうにせねばならぬ。

#### 第五十二課 アンモニア及び硝酸の化成

土壤中に施された有機肥料中の窒素化合物は、腐敗作用を受けてアンモニアとなり、畑地に於てはアンモニアは更に變化して硝酸となる。是等の變化は

### 硝化菌



何れもバクテリアの作用によるもので、前者は腐敗菌により、後者は硝化菌によるのである。  
アンモニア及び硝酸の化成は、土壤の水分が適度で空気の透過がよく、温度の高い時に盛に行は

### 第五十三課 肥料の配合

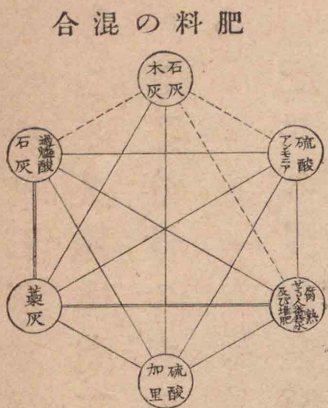
土壤によつては、其の成分の分量に差異があり、又作物によつては、各養分の所要量を異にするばかりでなく、之を吸収する力にも強弱がある。故に肥料は之を施す土壤と作物とによつて其の配合を適當に

せねばならぬ。

收穫の多寡は、土壤中に存在する養分の中で、作物の所要量に對して最も少いものの分量に支配せられる。此の法則を最少養分率といひ、肥料の配合の場合に注意せねばならぬことである。

### 第五十四課 肥料の混合

!!混合しては害あるもの  
!!早くから混合して置いては害あるもの  
!!混合して害のないもの



肥料は數種を混合して用ひることが少くない。肥料の混合が不適當な場合には、養分が揮散したり、或は不溶性のものに變じたりする不利がある。下肥硫酸アンモニアなどの如くアンモニアを含む



む肥料に、石灰・木灰などを混ぜれば、アンモニアを揮散させ、又過燐酸石灰に石灰・木灰などを混ぜれば、燐酸を不溶性のものに變化させるなどはその例である。

肥料の混合を適當に行へば、其の分解を促し、効驗を速にする利益のあることがある。菜種・粕・大豆・粕・魚肥・米糠などに木灰を混ぜるなどは其の例である。

#### 第五十五課 肥料の施用

肥料は其の施用に注意せねばならぬ。作物は種類によつて成長期に長短があり、之を栽培する目的にも差異があり、又土壤の吸収力にも強弱があり、氣候にも寒暖・乾濕の差があるから、肥料の種類・分量・施用

の方法及び時期などを適當に斟酌せねばならぬ。

#### 第五十六課 間接肥料

間接肥料のうちで最も主要なものは石灰であつて、左の効用を有する。

- 一、有機成分の分解を速にする。
  - 二、可給態養分を増加する。
  - 三、土壤の粘重性を軽減する。
  - 四、土壤の酸性を中和する。
  - 五、土壤中に存する有益な微生物の繁殖を助ける。
- 石灰は右の如き効があるけれども、之を濫用するときは左の害がある。
- 一、地力を衰耗させる。

二、收穫物の品質を不良にする。

第五十七課 酸性土壤及びアルカリ土壤

土壤には酸性を呈し、又はアルカリ塩類に富み、作物の生育に適しないものがある。

酸性の土壤を改良するには、石灰を施用するがよい。又場合によつては、排水・焼土などを行ふこともある。

アルカリ土壤を改良するには、灌漑・排水などを行ふがよい。

第五十八課 土壤の肥瘠

作物の收穫の多い土壤は肥沃な土壤で、之に反するものは瘠薄な土壤である。肥沃な土壤は左の條件を具備するものである。

- 一、可給態養分に富むこと。
- 二、化學的性質が良好なこと。
- 三、空氣・水・温熱に對する性質が良好なこと。
- 四、耕土深く、心土が良質なこと。
- 五、地下水面の深さが適當なこと。
- 六、有毒物を含まないこと。
- 七、有効な微生物に富むこと。

第五十九課 土地改良

土地改良には耕鋤・灌漑・排水・客土・焼土などの諸法がある。

耕鋤をすると、土壤は膨軟疎鬆となつて、空氣及び

水の流通がよく、風化作用がよく行はれる。

灌漑の目的は、通常土壤に水を供給するにあるが、又稀には養分を與へ、或は有害物を洗ひ去る爲に行ふ場合もある。用水は温暖なものがよく、有害物を含むものは不適當である。

排水の目的は、土壤中の過量の水分を除くにある。排水を行へば空氣及び水の流通がよく、風化作用がよく行はれ、温度が高くなるなどの効がある。

性質の異なる土壤を客入すれば改良の効が多い。砂土に埴土又は腐植土を客入するが如きはその例である。併し客土は土壤の運搬に勞費が多いから、廣く行はれ難い。

腐植土埴土には焼土法を行ふことがある。之を行へば土質を改良し、可給態養分を増加し、酸性を減じ、病菌害蟲雜草などを殺滅する効がある。焼土法を行ふには、火力を弱くし、徐々に燻焼することが肝要である。

#### 第六十課 耕地整理

土地の農業上の利用を増進する爲に、法律の規定に従つて耕地整理を行ふことがある。耕地整理法は、灌漑排水、土地の交換分合、區劃形質の變更、地目變換、開墾埋立干拓などを行ふものに便利を與へる爲に設けられたものである。

#### 第六十一課 輪作及び連作

作付の順次には輪作と連作とある。輪作法によるときは、地力を維持し、肥料を節約し、病害及び虫害を少くする利益がある。

連作法によれば、其の土地に最も好適せる作物を年々栽培することが出来る。此の法は忌地の憂や病害・虫害の少い作物、又は肥料を多く用ひても尙利益のある場合に行はれる。

## 第六十二課 土地

農業を営むには必ず土地がなくてはならぬ。農地には耕地・草地・林地の別がある。農地中最も重要なものは耕地であつて、之に田と畑とがある。全国を通算するときは、田と畑との廣さには大差がない。

農地の利用は氣候・土質・地勢などによつて相違があるばかりでなく、生産物の價格、市場の遠近、交通の便否などにも關係がある。

## 第六十三課 資本

農業の資本には、建物・農具・家畜などの如き固定資本と、種苗・肥料・飼料・貨幣などの如き流通資本とがある。

資本は潤澤に備へ、各種資本の割合も亦適當にすることが肝要である。資本が潤澤でない場合には、土地を十分に利用して多くの利益を擧げることが出来ない。故に農家は勉勵し、よく節約貯蓄して資本の増加をはからねばならぬ。

## 第六十四課 勞力

勞力もまた農業に缺くことの出来ないもので、土地及び資本と共に農業の三要素といふ。

勞力の効果は勞働者の智徳・熟練・體力などによつて大なる差異がある。勞力には自家の勞力と雇傭者の勞力とがある。雇傭者の勞力は成るべく之を節約し、自家の勞力は出来るだけ之を利用せねばならぬ。雇傭者には定雇・日雇・請負の別がある。請負は功程が速であるが、作業が粗雑に流れ易く、定雇及び日雇は之に反する。

農家は勞力を助ける爲に役畜を飼養する。役畜は通常牛と馬とで、各特殊の長所がある。

## 第六十五課 副業

農家の仕事は春秋の二季に多く、冬季は最も少いのが常である。副業を営めば農閑の勞力を利用し得ると共に、老幼の勞力も亦利用せられるので、農家の經濟上利益が少くない。

副業には藁細工・竹細工・疊表製造・花筵製造・麥稈眞田製造・眞綿製造・養魚など種類が多い。農家は事情に應じ適當な副業を選択して行ひ、寸暇をもよく利用せねばならぬ。

## 第六十六課 農業の經營

農業の經營は、一定面積の土地に用ひる勞力・資本の多少によつて、粗放と集約との別を生ずる。粗放經

營は生産に要する費用の少いのを可とする場合に行ひ、集約經營は生産の多いのを望む場合に適する。經營の大小は風土・經濟事情・作物及び家畜の種類などによつて得失がある。蔬菜・花卉・果樹の栽培、養蠶・養鶏などは大抵集約的小經營に適し、大經營は多くは粗放な穀菽栽培などに用ひる。

經營には自作と小作とがある。最も健全な經營は自作であるが、土地を所有しないものは小作によるの外はない。地主と小作人とは互に親愛し、相互に利益を増進する心掛が肝要である。

## 第六十七課 農家の共同

農家には共同して爲すべき事業が多い。水利・土工、

病蟲害の防除、用水の管理、稚蠶の飼育、機械の使用、資金の融通、肥料の購入、生産物の販賣などはその著しいものである。

産業組合も亦共同事業であつて、それに信用組合・販賣組合・購買組合・利用組合の別がある。農家は協力一致して十分に之を利用すべきである。

組合には尙水利組合・重要物産同業組合・茶業組合・畜産組合・蠶絲業組合・森林組合などがある。

## 第六十八課 農業簿記

農家は家計簿と營業簿とを別々に備へねばならぬ。營業簿は金錢出納簿・物品受拂簿などとなし、支出と収入とに分けて、日々の金錢の出納、物品の受拂な

どを明瞭正確に記載し、後損益の計算をなすのである。

損益の計算は左の如き項目に分つて行ふことが出来る。

収入の部

一、米	俵	圓	錢
一、繭	キログラム	圓	錢
一、卵	箇	圓	錢
一、繩	把	圓	錢
一、		圓	錢
一、		圓	錢
合計		圓	錢

支出の部

一、租税		圓	錢
一、農具		圓	錢
一、肥料		圓	錢
一、飼料		圓	錢
一、人夫	人	圓	錢
一、修繕費		圓	錢
一、		圓	錢
一、		圓	錢
合計		圓	錢
差引 (損益)		圓	錢

農家は又日誌を備へて、日々の出来事を記載する

ことが大切である。取引の少い農家では、金銭の出納、物品の受拂なども便宜日誌に記入して置き、之によつて損益の計算を行つてもよい。

## 第六十九課 市場

市場には常設のものと定日のものとあり、農産物の市場には穀物市場・青果市場・繭市場・家畜市場などがある。

農家は生産物を市場に出して、之を商人又は消費者に賣却するが、市場にはそれ〴〵特殊の商習慣があるから、よく之を研究して、不利益を招くことの無いやうに心掛けねばならぬ。又共同販賣をなすのは有利なことであるから、農業倉庫・販賣組合などを適

宜に利用するがよい。

## 第七十課 農學校・農事試験場・農會

農業の發達を促す機關には、農學校・農事試験場・農會など其の種類が多い。

農業教育の機關には、大學及び専門學校程度のもの、農業學校及び青年學校とがある。農家の子弟は便宜是等の學校に學び、智徳を磨き、技術を練つて、良き農業者となるやうに心掛けねばならぬ。

農事試験場には國立・道府縣立・私立などがあつて、農産の増殖・改良に關する試験、農事の調査、種苗の配布などをす。又蠶絲・畜産などに關する試験場もある。農家は試験の成績を參考とするなど、よくこれを



利用することが肝要である。

農會は農業の改良發達を圖る爲の團體である。農會法によつて設けられたものには、市町村農會郡農會道府縣農會及び帝國農會がある。尙他に大日本農會大日本蠶絲會中央畜産會大日本山林會などがある。

第七十一課 農業と國家との關係

農業は國民の健康と思想の健全とを保持し、國を富まし、兵を強くし、國家永遠の繁榮の基礎として缺くべからざるものである。故に國家は農業を尊重して其の發達を圖るのである。農業者はよく精勵して身を立て家を興すと共に、國家に貢獻する覺悟がななくてはならぬ。

昭和五年四月九日 印刷  
 昭和五年四月十二日 發行  
 昭和十五年三月二十六日 訂正印刷  
 昭和十五年四月十八日 訂正發行



不許複製

著作權者 文部省

發行者 東京市京橋區銀座一丁目五番地 大日本圖書株式會社

右代表者 取締役社長 杉山常次郎

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 青木弘

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

東京市京橋區銀座一丁目五番地

發行所 大日本圖書株式會社

振替口座東京二一九番・電話京橋二七三番・二七四番

小學農業書男子用奧附

定價	卷一金貳拾貳錢
價	卷二金貳拾貳錢

16-1

